



古賀、三年ぶりの個展である。今回は、自己が幼少の時に愛用したりカちゃん人形の写真であった。今回も日記、落書帖、洋服などの幼少の愛用品を撮影した写真なので、主題に変化はないことが伺える。それにより、古賀の作品に対する私の解釈が、より、鮮明となった。

前回、私は以下のように評した。「古賀は自らの視線を徹底的に個人化することによって、個人という者を喪失する。そのため、撮る/見るという行為自体が失われていくのだ。古賀の作品を眼にすると、次々に砂塵の如く、作品の表情は消えていく。」

今回私が感じたのは、古賀が自らの視線を徹底的に個人化し、個人を喪失する点において変化はないのだが、見る者からすると、写真に写し出されている対象が古賀個人の所有から離れ、誰もが共通する印象、つまり「ああ、こんなことしたり似たようなものを持っていたりしたな」という感触を得るのである。

つまり古賀という個人を超えて、誰もが持つ普遍的な問題意識に転化していくことに私は興味を覚えるのだ。それは日本人特有という場所や、古賀が幼少の頃が日本のどの時代であったかという時間も乗り越えられているのではないかと思う。すると、アジアも欧米も問題にならない。

西洋の服を着て、西洋の画材を用い、生活することが我々の現実である。もはや着物と筆が日用品に戻ることは、決してないだろう。例えば日用品に大きな変化が起きようとも、時代と場所を越えて変わらないものがあることを、逆に知らしめているといえるのではないだろうか。

この事実を、古賀が写真を用いて伝えてくれたことにも大きな意義がある。芸術の写真の対極に位置するのが、報道写真である。確かに芸術の写真でもストレートフォトの技法を用いている場合は多々あるが、古賀の視点は芸術的というよりも徹底的に自己を排除する点において、報道写真的であると解釈することも可能ではないだろうか。

